
改心新心

中田 勘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

改心新心

【Zマーク】

Z3888Z

【作者名】

中田 勘

【あらすじ】

虜められる少年は旅をします。
そして夏休みある森を訪れます。
すると夢か現実か少女に会います。

僕の扱いって機械に似てるよね。

だってほら、いつもは放置されてるけどたまに必要になつたら呼ばれてさ。

パシリだつたり、暴力だつたり、責任転嫁だつたり、靴隠されてピエロとして踊らされたり。

みんな僕を殺したいんだろうけど、いつかは使えるからと思つてになるから殺さない。

僕が屋上から突き落とされても周りのみんなは自殺だつと言つて、大人もそれを信じると思うな。

まったく、僕には人形と違つて心があるつてのにさ。

『だから僕は心を消した』なんてそんなこと、この世にあるわけ無いのにそれを望んで。

まったく僕はどうかしてるよ。

僕がこんな扱いを受けるようになつてどのくらいだらうか。
中学の2年生あたりか。

それから虐められて、やつとは入れた高校では同じ学校の人の中でも不良の人と同じどこだった。僕の扱いって機械に似てるよね。だってほら、いつもは放置されてるけどたまに必要になつたら呼ばれてさ。

パシリだつたり、暴力だつたり、責任転換だつたり、靴隠されてピエロとして踊らされたり。

みんな僕を殺したいんだろうけど、いつかは使えるからと思つてになるから殺さない。

僕が屋上から突き落とされても周りのみんなは自殺だつと言つて、大人もそれを信じると思うな。

まったく、僕には人形と違つて心があるつてのにさ。

『だから僕は心を消した』なんてそんなこと、この世にあるわけ無いのにそれを望んで。
まったく僕はどうかしてるよ。

あんな状況じゃあ勉強もろくに出来ないことは分かつてはいた。
でもこの程度の偏差値の学校にしか入学し出来ないとわかつたとき
にはさすがに絶望したな。

結局僕は高校でも同じ田に合つたよ。

今度は一年生から。

中学から知ってる不良の奴らから虐められて。

それを周りの奴が見て、笑つて。

一年の夏休みが始まる頃には中学のころと同じ状況。
ただ一つ変わったことは僕を虐める人が増えた事だけ。

今年はストレスがたまりすぎたから今年の夏休みはちょっと旅をしてみようかな。

準備は夏休みが初まつてから始めた。

それまでは宿題を貰つた片つ端からやつていった。

当然それは大変な事だつたけど虐められる要因を絶つためだからしかたがなかつた。

親には旅に出ると言つた。

僕の親は放置主義だつたから一いつ返事で了解した。

きっと食費が浮く事がうれしいのだろう。

旅の間の食費は僕持ちだつた。

準備は始めて3日目で終わつた。
少なくとも、携帯とお金は必要。
寝泊りは野宿する気満々だ。

僕はこれで何か変わるといいなと思いながら家を出た。

今日はひたすら移動の日だつた。

時刻は1時。

都会の空気から逃げるべく僕は電車に乗り込んだ。

こんな空気を吸うから、簡単に人を傷つける事のできる人間が出来上がるんだと思わなくも無いが、僕は虐められる側だから傷つける事は出来ないとしても、僕のことを虐めも傍観もしない、つまり僕に興味を示さない人もいるからそれは無いと思う。

だいたい、ここは街と言われるところとは離れている。もちろん市内にも街はあるが車がひしめき合っている様子は無い。

『人は傷つけあいながら生きていくものです』というなら僕は誰を傷つけているんだろう。

あんなにも僕に興味を示さない親にか。

僕を虐める奴らは僕に傷つけられたから、傷つけ返すのか。
僕は皆に何をしたんだろう。

悲壮感に浸つていて少額の涙が目の下を濡らした。

ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン。電車を乗り換えながら13の駅を過ぎた頃僕のいる県の街。つまりは県庁所在地に着いた。

当然駅で止まるのだから乗り物を経由せず、今度はなれないながらも新幹線に乗るための切符を買って新幹線に乗り込む。

ところで駅では驚いた事が多かった。駅には沢山の人人がいて、店が並んでいる。

コンビニもあって、レストランもあって、それは信じがたい光景だつた。

見て決して人が多い時間とは思えないがそれでも僕からしたら多い方だと見える。

そんな驚愕も冷めてきたころには新幹線内で買った弁当を食べて初めていた。

4時間ぐらい、見た目的には変わらないものの様々な都道府県をまた

いでようやく新幹線をおり、バスに乗って、降りて、數十歩歩いて目的の場所に着いた。

そのころにはもう夜だった。

そこは自然しかない場所だった。

信号も、横断歩道も、電信柱も、マンホールもそんなどんな場所にもあつてもよさそうな物すらなかつた。

つまりは整備されていない山だ。

きっと太陽の光も木によつてほとんど遮断されるのだらう。

予定どおり今日はここで野宿だ。

のびをしてあぐびが出る。

かなり早いが明日は早起きをするつもりだつたから今日はもう寝ようと思つた。

夢を見た気がした。

たしか、一人の少女がいた。

少女と行つても僕と同じ高校生ぐらいだつたが。

いいや違う。

中学生ぐらいの少年もいた、成人した男女も。とにかく十数人の人がいた気がした。

しかし、次第に去つて行き、あの少女と少年が最後に何か話したようでそれから少年の方が去つていつた。

「こんちは」

少女が話しかけてきた。

背丈は平均より低いと思う。

長い髪は結ばれていくことなく首の付けの伸した辺りまで伸びている。

どこかの学校制服を着ていた。

ああ、分かつたここに来る途中に見た、たぶん高校生が来ていたものだ。

ほんの少し悲しそうな顔をしている。

そんな少女の首にはなにやらアザがあつた。

「こんにちは」

僕は返事をする。

「あなたは何故ここに来たの。自然観察だつたらもつといい所があるわ」

「誰だかわからないけど、理由は分かつてるんじゃないの。何だかあなたは僕の先輩になりそうだよ」

「私はそうして欲しくないから出てきたのよ。さつきいた人たちがみんな差別されてきた人たちだったの。私はこうなつた事を後悔してるわ。何故あのとき頑張れなかつたのかつて今でも悔やんてる。だからこうやってたまに来る人に会いに来るの。同じ思いをして欲しくは無いわ」

「いい人だね。その逆に同じ田にあわせようとする奴らもいそな物なのに。ああ、君のよつた人がいないとは言わないけどさ、過半数は悪者だと思う」

「ありがとう。でもね、こんな性格がみんなにはウザい、ウザいつて言われてたの」

「世の中そうなもんだよね。正義は狙われる。僕の場合は正義でもなんでもない、ただの的だけど」

沈黙ができる。

そう言えばここはどこだろう。
暗くてよく見えない。

でも、僕の寝付いた森なのか。
そして、僕はまた話だした。

「僕の扱いつて機械に似てるよね」

「そうかしら。会つたばつかりだからよく分からいわ

「だつてほら、いつもは放置されてるけどたまに必要になつたら呼ばれてさ。

パシリだつたり、暴力だつたり、責任転嫁だつたり、隠されてしまふとして踊られたり。

みんな僕を殺したいんだろうけど、いつかは使えるからと思つてになるから殺さない。

僕が屋上から突き落とされても周りのみんなは自殺だりと叫んで、大人もそれを信じると思つた。

まったく、僕には人形と違つて心があるってのにさ。
『だから僕は心を消した』なんてそんなこと、この世にあるわけ無いのにそれを望んで。

まったく僕はどうかしてるよ

「抵抗しないの」

「君が言うなよ。まあ、でも出来ないよね。一人対多数で勝てるとは思えないから普通に考えて抵抗は出来ない。大人に陰口しても結局相手の奴らを顰蹙させてしまつかもって言えないし」

「そうよね。私もそうだったから。でも、これだけは覚えて欲しいわ。私を含めて他の彼らもみんなあのとき踏ん張れずこうなったことを後悔しているわ」

少女は一拍置いて。

「私から言えることはもう何もないけど、私が言ったことだけはよく覚えておいてね」

「あ、ああ」

なんで僕は返事に詰まつたんだろう。

「じゃあね」

そういうつて少女はどこかに去つていった。

僕は早朝。

ただしそれは時間帯の名ばかりであつて実際は午前3時ぐらい。そんな時間に僕は山の中で涙を流しながら立つていた。

「夢じやなかつた……、のか」

ああ、僕はなんてことを考えていたんだろ。

こんな所まで来たのは僕がまだ生きたいと思ったことの表れじゃないのか。

こんな山に入りこまなくて、学校の屋上で柵を越え下を覗けばそれで済んだじゃないか。

どうせ山でも学校でも止める者はいないの。家に帰るうが。

家に帰ると親はなんとも面倒そうな顔をした。
それはそうだろう、夏休み中居なくなるはずの奴が一日で帰つてきたのだから仕方は無からう。
でも、それは全部無視だ。

悲しむのに疲れたので喜びます。
憎むのに疲れたので愛します。
苦しむのに疲れたので、この世を楽しんでみよつとます。

(後書き)

ただ、書いてみたくなったので書きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3888n/>

改心新心

2010年10月9日19時13分発行